ザンビア特別教育プログラム20年の歩みと成果調査報告 ～制度としての展開および人材育成～

広島大学大学院人間社会科学研究科
国際教育開発プログラム

馬場卓也、丸山隆央

2022年3月5日

広 島 大 学

1

発表の流れ

広 島 大 学

1. ザンビア特別教育プログラムの概要

2. ザンビア特別教育プログラムの歩み
※本スライドでは人物の職位は当時のものを記載しています。

3. ザンビア特別教育プログラム修了生のキャリアに対するプログラムの影響

2

1. ザンビア特別教育プログラムの概要

広 島 大 学

- 青年海外協力隊派遣を組み入れ、学位（修士号または博士号）の取得が可能な教育プログラムとして、ザンビア特別教育プログラムは日本で初めてのもの（加藤・馬場 2010）。
- 学生の受入を2002年4月に開始し、2022年2月までに延べ39名がプログラムを修了。そのうち5名はザンビア特別教育プログラムにて修士課程修了後に博士課程に進学して博士号を取得していることから修了生は34名。
- プログラムにおいて学生は入学後、協力隊員に応募し、派遣前訓練に参加するまでの間、広島大学にて講義・演習科目を履修。派遣前訓練参加後、学生はザンビアに青年海外協力隊員として2年間派遣され、帰国後、論文執筆に取り組む。
- 学生はザンビア派遣中、学校現場における協力隊員としての活動とともに、研究活動に取り組む。

図1. ザンビア特別教育プログラムの標準スケジュール

2. ザンビア特別教育プログラム開設の背景・経緯（～2002年）

広 島 大 学

(1) プログラム設立の背景（1990年代～2000年初頭）
- 国際開発分野の人材育成ニーズの高まり。
- 大学の国際教育協力活動参画への期待の高まり。
- 開発援助における基礎教育分野重視の流れ。

(2) 中山修一教授（現 名誉教授）が1998年4月に国際協力研究科長に就任し、連携教育プログラムの設置についてJICAに検討を依頼。
- 国際開発分野の理論と実践を究めた人材育成のため、開発援助の現場を学生が経験する機会を大学院のカリキュラムに導入することを構想。
- 派遣者への支援体制の充実していたJICA青年海外協力隊事業との連携が模索。

(3) 1999年7月の木谷隆JICA理事と広島大学の原田学長の面談を契機として両機関間で本格的に検討が開始される。
- JICAと広島大学の合同によるザンビアでの協力隊派遣要請開拓調査（2001年）（岩崎秀樹助教授（現 名誉教授）及び栄永唯利氏が広島大学から参団。）
- 2001年3月、プログラムの設置が承認される。
- 2001年5月、JICAと広島大学の間でプログラムにかかる協定書が締結される。

2. ザンビア特別教育プログラム開始期における体制整備（2002～2007年）

広島大学

- 2002年4月にプログラムの学生3名が国際協力研究科に入学し、プログラムが正式に開始。
- 学生指導・支援体制の充実。
  - 馬場卓也助教授（現 教授）が2003年度に国際協力研究科での教育・研究活動を始め、2004年度に池田秀雄教授（現 名誉教授）が教育学研究科から国際協力研究科に所属を移す。
  - 数学教育開発論や理科教育開発論等の科目を通じ、派遣前の学生指導。
  - 広島大学とザンビア大学との覚書の締結（2002年12月）。
- 派遣中の学生に対する研究指導の工夫。
  - メール形式でのゼミ指導例（研究報告を行う当番学生がメールで教員及び他のゼミ生に発表資料を送付。教員及びゼミ生からコメントがあり、当番学生がコメントへの回答を返信という三段階の流れによる実施）。
  - 年1回、指導教員がザンビアに出張し、現地で学生に指導。
- 休学措置の導入。
  - 学生は3年半（プログラム標準期間）のうち最長で1年半の休学申請が可能。

5

2. ザンビアにおける教育開発関係者との連携強化（2007年～）

広島大学

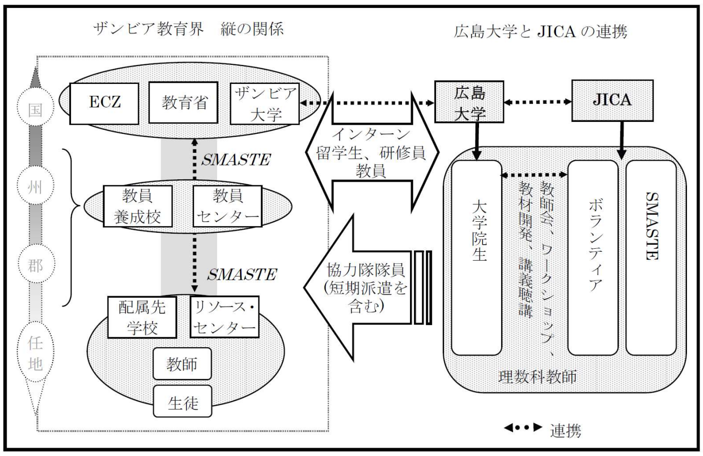


図2. ザンビア特別教育プログラムの展開イメージ図（加藤・馬場 2010）

注： 図中のSMASTEはJICAがザンビアで実施中であった教育分野の技術協力プロジェクトの略称。

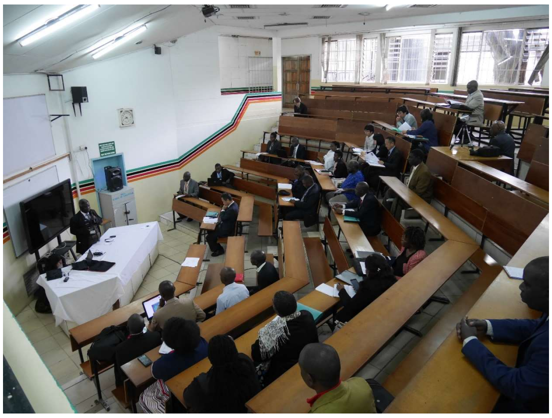
馬場准教授（現 教授）と内田豊海氏による合同調査でのプログラム運営にかかる提言（2007年）。

- ザンビア大学との連携強化。両大学による合同ワークショップの開催。
- JICA技術協力プロジェクトとの連携強化。ザンビア教育省、カリキュラム開発センター、ザンビア試験評議会などの連携。
- 教育分野の他の協力隊員との連携強化。

6

2. ザンビア大学・広島大学による合同ワークショップの開催（2007年～）

広島大学



2017年に開催された合同ワークショップの模様

- 2007年以降、広島大学の教員のザンビア出張時に、年1回計13回の合同ワークショップの開催（2020年及び2021年は新型コロナの影響により開催見合わせ）。
  - 国・州・郡レベルの様々な教育省関係者の参加。
  - ザンビア大学教員、教育省関係者、広島大学教員、プログラム生隊員、一般隊員、マラウィ国参加者による研究発表。
  - 開催にかかる現地費用はザンビア大学、広島大学で分担。
- 合同ワークショップ開催の他、ザンビア大学から研究者を招聘。
  - Nkhata Bentry氏（2016年）等。

7

2. ザンビア特別教育プログラムを起点とした活動の広がりの代表的事例

広島大学

- JICA本邦研修・専門家派遣を通じた貢献
  - 本邦研修「理数科カリキュラム改訂支援」（2010年）、カリキュラム改訂支援（数学・理科）調査（2013年）等。
    帰国研修員の携わる数学・理科カリキュラム（第1～12年生）の改訂を支援。改訂された数学・理科のカリキュラムが2013年にザンビア教育省により採択。
- 留学生受入を通じた貢献
  - Benson Banda氏（現 ザンビア教育省国立科学センター長）（2011年に国際協力研究科で修士号を取得）等。
- 研究活動を通じた貢献
  - JICAプロジェクト研究「初等算数課題分析」（2017～2021年）等。

8

3. 修了生のキャリアに対するプログラムの影響

広 島 大 学

- 本調査におけるキャリアの定義、焦点
  - 「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」という中央教育審議会の定義(2011年)のもと、職業・仕事の側面に焦点をあてる。

- 調査の方法
  - 修了生に対するアンケート調査： 匿名性を担保するためウェブサイトへの記入形式にて実施。修了生34名中、連絡可能な33名に2021年9月に送付し、26名（回答率78.8%）から回答が得られた。
  - 修了生に対するインタビュー調査：
    - インタビュー対象者は、馬場・下田（2015）の提示した修了生のキャリア4類型（研究者型、国際協力実践者型、学校教員型、民間就職者型）をもとに、各キャリア類型から2名計8名を選定。対象者毎にオンラインにて2021年10月に実施。
    - 対象者からの事前回答や提出されたアンケート結果をもとにしつつ、対象者の回答に応じて追加質問や質問の順序を変更する半構造化インタビューにより、聞き手を株式会社WAVEに委託して実施。

9

3. 修了生アンケート結果概要

広 島 大 学

- 修了後のキャリアの動向（馬場・下田（2015）のキャリア類型をもとに、アンケートに回答したプログラム修了生26名を分類。）

キャリア類型	該当者数	アンケートに記入された職業・所属先
国際協力実践者型	4名	コンサルタント（2名）、JICA（1名）、個人事業(1名)
研究者型	5名	大学教員（4名）、国立研究所（1名）
学校教員型	10名	小学校教員（1名）、中学校教員（2名）、高等学校教員（5名）、教員（2名、アンケートにおいて教育段階の区別の記載無し）
民間就職者型	7名	教育系民間企業（3名）、製造業（2名）、商社（1名）、ソフトウェア企業（1名）

- プログラムにより得られた専門的知識・技能
  - アンケート回答者**26名のうち24名（92.3%）**が、プログラム参加を通じ、専門的知識や技能を得られたと回答。

  主な回答の例

  - 国際協力や理数科教育にかかる知識やスキル（民間就職者型を含めてキャリア類型に共通）
  - 人脈やネットワークといった人間関係の側面、現地の状況をもとに活動を組み立てて展開する対処能力（国際協力実践者型）
  - 開発途上国における教育実践の経験等（学校教員型）
  - 開発途上国の教育課題にかかる理解や、研究の方法や研究者としての姿勢（研究者型）

10

3. 修了生アンケート結果概要

広 島 大 学

- 修了後のキャリアへのプログラムの影響

  - アンケート回答者**26名のうち25名（96.2%）**が、プログラムは修了後のキャリアに影響を与えている、と回答。

  主な回答の例

  - キャリアにおける入口となったこと（国際協力実践者型）
  - 研究における視点の重要性や修了生間のネットワークを得られたこと（研究者型）。
  - 日本の教育現場における生徒達への還元ができること、国際交流や国際教育との関係がもてたことや国際協力の視点を教育現場に携わることができること（学校教員型）
  - ザンビアにおける体験をもとにしたキャリア選択への影響等（民間就職者型）。

11

3. プログラムでの実体験を通じて培われる視点：ザンビアの教育を全体的にとらえる視点

広 島 大 学

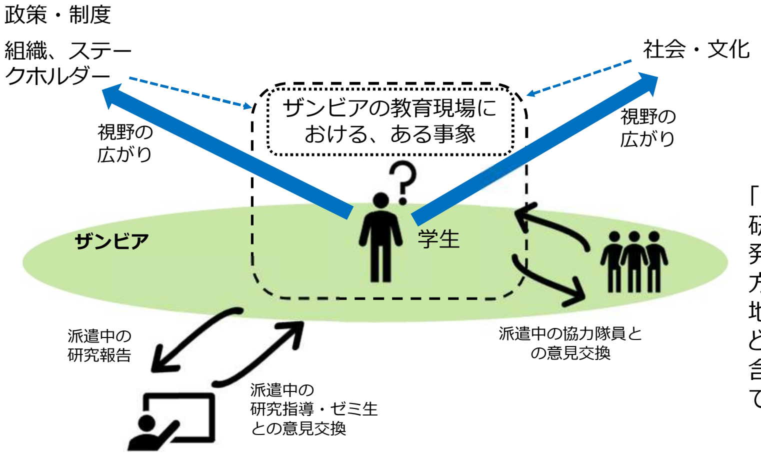


図3. 政策・制度・文化等の背景要因を含め、ザンビアの教育を全体的にとらえる視点

「ザンビア特別教育プログラムでの国際協力の研究は幅広いですね。授業レベルでは、先生の発問から指導の仕方や子どもの記述から学び方を見たりします。また、学級経営、学校運営、地域と学校との関係、中央政府で教育予算がどれ位どこについているか、そういったことを全部含めて国際協力の分野では教育の改善を考えていきます。」（A氏、研究者型）

12

3. プログラムでの実体験を通じて培われる視点：ザンビアの教育を相対的にとらえる視点

広 島 大 学

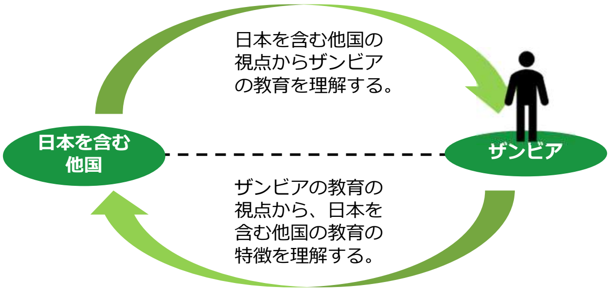


図4. 他国からザンビア、ザンビアから他国を見る視点
（国を相対的にとらえる視点）

「ザンビア特別教育プログラムでは一方で、大学院生として研究をしていましたので、ザンビアのシラバス（日本の学習指導要領にあたるもの）と日本やイギリス等を比較する中で、日本の教育のよい面（体系的なところ）や、ザンビアの教育へのイギリスの影響、ザンビアの教育で独立後変わっていない面等が分かりました。ザンビア特別教育プログラムでは、様々な視点から、ザンビアと、日本やイギリス等とを比較することを通じ、自身の専門性が高まったように思います。」（E氏、学校教員型）

13

3.プログラムでの実体験を通じて培われる力：研究と実践を往還しながら考察を深める力

広 島 大 学

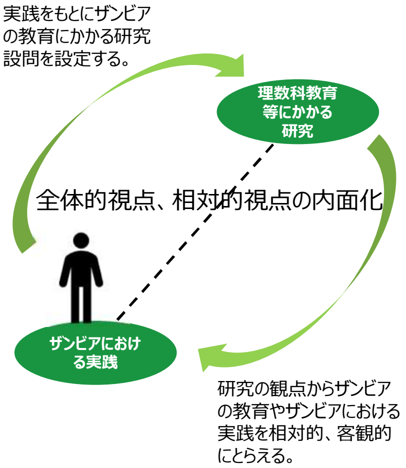


図5. ザンビアの教育にかかる実践と研究の往還

- 研究の観点から実践の場における課題をとらえる、またザンビアにおける実践をもとに研究設問を定めて研究に取り組む、という関係は左図のとおり表される。
- 研究と実践は、研究が実践の課題を明らかにする一方で、実践が研究の課題を提示するという、緊張関係にある。

14

3. ザンビア特別教育プログラムの提示する、研究と実践の往還によるキャリア発展モデル

広 島 大 学

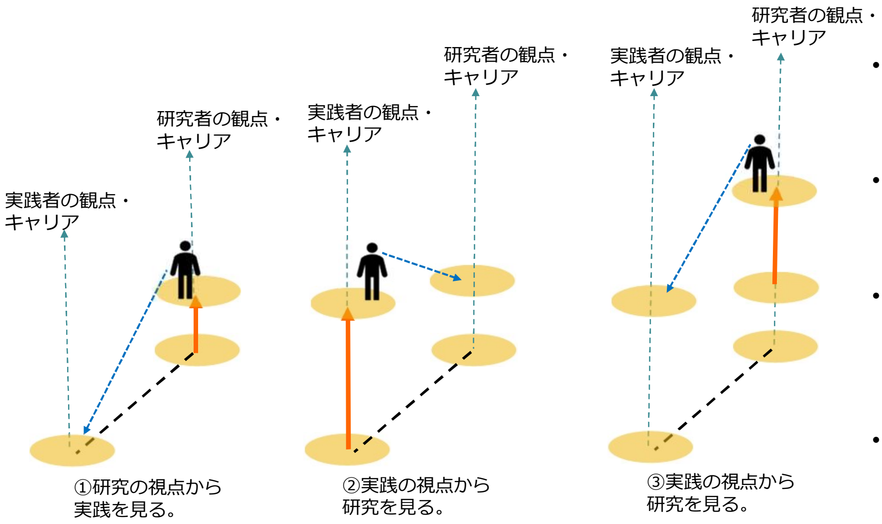


図6. 研究と実践の往還を通じたキャリアの発展

- 研究の視点から実践を見ることで実践の課題が見えてくる（図6①）。
- 実践の視点から研究を見ることで研究の課題が見えてくる（図6②）。
- それらの課題に取り組む過程で研究、実践の力がそれぞれ向上し、向上を通じて新たな課題が見えてくる（図6③）。
- 研究と実践の往還を通じ、社会における自身の役割を発揮し、社会の課題解決に貢献していく。

参考文献

広 島 大 学

加藤雅春, 馬場卓也 （2010）「第6章　広島大学大学院国際協力研究科　ザンビア・プログラム「IDEC-JICA連携融合事業」」北村友人編『グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究』文部科学省.

馬場卓也, 下田旭美 （2015）「ザンビア特別教育プログラム成果と課題: 縦断的調査に基づいて」『ザンビア特別教育プログラムの成果と課題II』広島大学大学院国際協力研究科.

中央教育審議会（2011）『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf.

ザンビア特別教育プログラム修了生インタビュー記録（2021年10月）.